

# KSKP サロン・あべの NO.61

## 「自助具の部屋」

サロン・あべの六月の出会い

梅雨の晴れ間にあじさいの花  
 がたおやかにゆれる平成三年六  
 月十五日（土）午後一時～四時  
 育徳コミュニティセンターに  
 於て、ボランティアグループ「  
 自助具の部屋」の酒井佐和子氏  
 （会長）・中島博氏（副会長）  
 を迎えて話を伺った。

自助具についての講習会を受  
 けた人達が日本の障害者の為の  
 自助具を作っていこうと日本で  
 初めてのボランティアによる「  
 自助具の部屋」が八年前に誕生  
 した。

それまでの自助具は、外国製  
 品が主流で日本の障害者には使  
 いづらい面もあり、又値段も高  
 く求めにくかったので、設立後  
 は多方面から関心を持たれ注目  
 された。

会員は、定年退職者をはじめ  
 木工職人、電気屋、クリーニン

グ屋、施設職員、在宅障害者・

児の家庭訪問員、PT（理学療  
 法士）、OT（作業療法士）、  
 看護婦、ドライバー、主婦、障  
 害者等バラエティーに富んだ人  
 たち五五～六名が登録している。  
 会費は年二〇〇〇円で、遠方  
 の人達や、参加出来ないが情報  
 だけは欲しいという人（医者、  
 教師、障害者等）には情報紙（  
 年間一二〇〇円）が送られてい  
 る。

例会活動は、毎月第二日曜日  
 （午前十時～午後四時）大阪市  
 中央区森の宮にある大阪府立青  
 少年会館内で開き、毎回十五～  
 六名が参加している。午前中は  
 ミーティングをしてその一ヶ月  
 間に作った道具や、依頼をうけ  
 た道具についてのアイデアを出  
 しあったり、アドバイスをし  
 たり等、意見交換をする。午後  
 からは、作品作りにとりかかる。  
 工作機械は、一通り揃っている  
 のでたいがい品物は作ることに

が出来る。

その他の活動としては、自助  
 具・福祉機器についての情報の  
 収集と交換や、展示会や相談会  
 等が多くあり、幅広く社会との  
 繋りを持ちながら、多くの人達  
 との出会いを楽しみにしている。  
 「自助具」というのは、ハン  
 ディキャプトに生活の広がり  
 と喜びを与え、自立を助け社会参  
 加への道をも開いてくれる道具  
 ではあるが、それに頼ることに  
 よって、残っている能力や開発  
 されるであろう機能を失うこと  
 のないように、心掛けて使用し  
 なければいけないと考えている。  
 使う人に一番必要な物を作って  
 いきたいが、基本的には、無く  
 ても出来ることならその能力を  
 生かしていける方向を考えてい  
 きたい。

「自助具の部屋」では、様々  
 な品物を作っている。その中で  
 のヒット商品は、キーボードの  
 カバー。これは、パソコンやワ

iproの普及によって手の不自由な人には不可欠な品物となっている。市販価格は四〜五万円、「自助具の部屋」で作ると三五〇〇円（実費）で作成される。全国から注文が来るが、個人に合った物を手作りで作るので製作が追いつかないほど。

作る側のモットーとしては、機能面ばかりでなく、デザイン的にも優れた物で、きれいな仕上で楽しい物にと考えている。

品物の価格は、実費（材料費と送料等）となっている。

と話を伺った後、持参下さった自助具の数々を見せていただいた。

○手の不自由な人からの依頼で作られた釣り銭器は厚生大臣賞を受賞した。これを使用することにより、この人は大仙公園の売店に就職が出来た。  
○カラフルな色合のプラスチックで作られ た牛乳パック立ては、バックを開くとき倒れ

ないようになっている。

○右半身不随の人や片手使いの人が編める編機（かぎばり・二本針編み）や刺繍枠、まないた（板に釘が突き出て、ここに野菜等を刺して固定して切る）。

○手の上らない人用の長い柄のついたヘヤーブラシ。

○トランプを持ってない人用のトランプ立て。

○台付きの爪切、片手の不自由な人や足に 手が届かない人が一人で顎や足を使って爪を切れる様になっている。

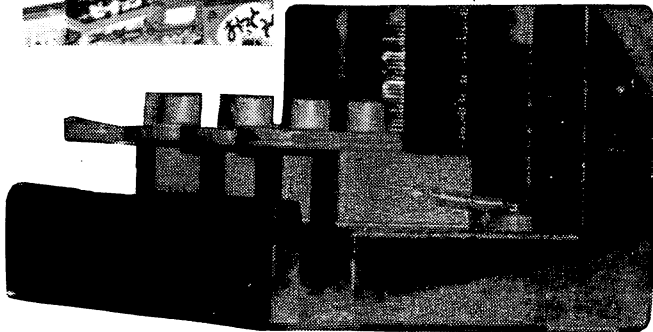
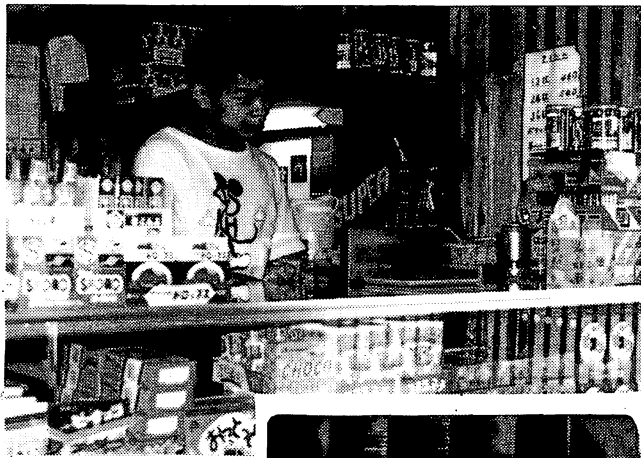
○風呂場でも曇らないで使用出来るプラスチックのミラー。

○ジュース等飲めない人の為に

ストローを固定してコップに付けるストロー止め。

○ラーメンの鉢を固定させる台。  
○洗剤（ビン型）の空容器で作られた簡易取尿器（女性用）、旅行の時など座席で使用出来る。

○その他リーチャー、様々な持ち柄のスプーン等々が披露さ

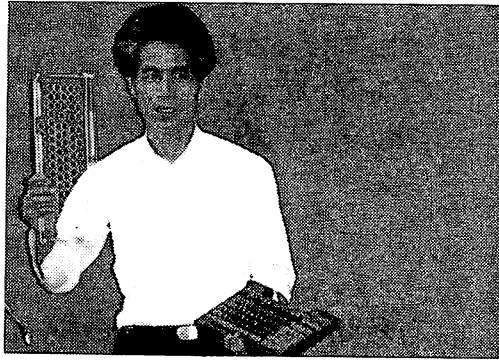


大仙公園の売店（上）で厚生大臣賞受賞の釣り銭器（下）を使っの店頭販売（中）

れ、使い勝手のよい品物に参加者一同感嘆した。

この後、参加者から自分達が日頃欲しいと想っている品物について話が交わされた。

この日の参加者、二九名。ビデオ操作は植松菊雄氏、司会は旭純子さん。



大ヒットして製作が間に合わないパソコン、ワープロのキーボードのカバー

## こんな物 ほしい

リクライニングチェア

パーマ屋さんで使っている様な、高さや角度が自由になる椅子が欲しい。

近藤 千枝子

愛の手が、ほしい

あれがあれば、便利だろうとか、こういうのがあれば助かるだろうとか、日頃はあれこれと考えているけれど、いざこのような品物が欲しいというときには想いつかない。家の中で動くぶんには、有るべき所にいつもの品物が有れば不自由なく使いこなせるので、不便はさして感じない。けれど、一人歩きが出来ない視力障害者にとって外出する時など、すぐに手引きの人が見付かりにくいので、出来ることなら必要な時にサッと出てくる「愛の手」が欲しいと想う。

田 辺 さかえ(文責) 富田

変化自在五徳棒

五徳ナイフのように、一本の棒に吸盤・掴み機・ひっかけ鉤・プッシュ用ボタン・靴ペラ等々の機能が組み込まれていて、必要な時に用途に応じて棒の先から出てくる伸縮自在の先端変化棒があったら、リーチャーやマジックハンドや孫の手やと持ちまわらなくて助かる。

富田 慶子

携帯用スロープ

電車とホームの段差をなくすのに、専用の板を備えつけてある駅ではないが、ない駅での乗降は大変である。これ用に携帯用スロープはないものだろうか。

もちろん、あるにはあるが、スチール製で十四センチと重く、携帯には程遠いしろものである。参考までに、お値段は消費税別のもので、三六、〇〇〇円也。

仮免の車イス運転士

花の第五日曜日



日曜日だったら・・・の声に、今年度から出来た「花の第五日曜日」。  
その第一回が六月三〇日(日)十時〜十三時、長居の身体障害者スポーツセンターでのボーリング大会でした。

まず、ボーリングのボールを選別。各自の手に合った重さのボールを捜します。次にボーリング用の靴に履きかえて、いよいよレーンに向います。

一投の行方は・・・?  
ボールは、ルル……

素直に中心の直線を走って行くボール  
途中からアララ……

歓声があがるボール、惜しまれるボール。  
一投入魂、狙い定めて投げてはいるけれど、思う程には走ってくれない。

ああすれば、こうすればと賑やかに話がはずんでいく内に早くもゲームアウト。

ゲーム後、二階のラウンジで昼食。話の花が咲き、アフターゲームも楽しみました。

この日の最高得点者は、東谷和代さん。  
この楽しい出会いの一部始終を植松氏がビデオに。参加者九名。

おしらせ

八月の出会い

日時 平成三年 八月 四日(日)

午後一時〜九時

場所 工芸高校グラウンド

「阿倍野区役所(大阪市阿倍野区

文里一―一四〇)の裏」

内容 あべのカーニバル・なんでも市

バザー店「さろん亭」開店

\*ご協力のおねがい

○バザーで売る品物を寄贈してくれはる人

人

○当日のお手伝いしてくれはる人

○「さろん亭」に買いに来てくれはる人

問い合わせ TEL: 06-691-1028 (富田慶子)



「あっちゃんのシングルライフ」(山本篤江)しばらく休みます。

みんな 人として

しっかり生活していけたらなあ

湯浅 真佐子

△サロン・あべのV六〇号を読ませていただいて、私も福祉の仕事に就いていて、いろいろ感じるものがありました。

私が勤めています保育園も、今までに何人かの障害児を卒園させています。小学校へ行くにあたって、保母も悩み、また一番しんどい思いをしたのがご両親や本人だったと思います。地域の小学校によっては、「入学の年、障害児が三人以上いないので養護学級はつくりません。他に移って下さい」と入学しても一人だけなので、普通学級にいれます」という返事もあり、聞こえは良いようなことでも深く考えてみると、その子にとって本当の発達にみあった環境の保障、学習の保障になっているか考える疑問が残るようなことが多々あると思えました。もちろん、全部が全部、そのような受け入れではなく、養護学校へ行き、学

習もし、本当に生活していける力をつけている子も数多くいます。

保育園に勤め、その他色々な活動をさせよう中で、障害児ともたくさん出会い、そのお母さん方とも出会いました。



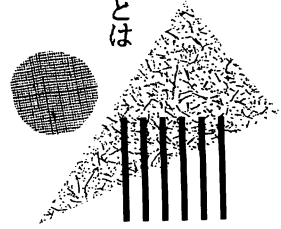
保育園で健常児と過すことが多くても保育をしていく上で、なかなか考え方があわなかったり、こちらが、成長していくにつれ年齢にあったり生活していく力をつけようと思ひ、あれこれやってみても保育園

にいる間だけのしつけみたいなので、その子どもの力にはならないことが多くあり、毎日「保育って何やる?」「子どもを一緒に育てる……って何やる」と悩んでいます。

自分が母親になれば、わかるのかなあと一人で納得したりすることもありますが、仕事となれば保母の目です。嘉戸先生のお話にも出ていましたが、「親は子どもの将来を考えないで、ミエに走りやすく……」とありましたが、本当にいろいろな習いものもあり、通わせたりし、結局子どもがどうかと考えてみれば、生活するのに必要な応答活動や身のまわりにのことなどが全てできなくなっており、考えさせられことばかりです。

健常児で、そんな例が多い中、障害児の母親、父親となれば、ハンディを背負って……と、思ひこむ分、ミエも多くなるのでしうか。健常児、障害児共に人として、しっかり生活していけたらなあと思ひます。私も、そのぶんまだまだ勉強勉強の毎日です。

セルフヘルプとは



愛知県立大学

岩田 泰夫

セルフヘルプグループとは

セルフヘルプグループ（ $\wedge$ 自助 $\rightarrow$ 互助 $\vee$ 援助集団）とは、「脳卒中の友の会」「スキーを楽しむ障害者の会」「精神薄弱児の親の会」などの患者や家族会などの自主的なグループを言います。

三つのしごと

ところで、人の活動には、いつも三つの「しごと（作業）」が含まれています。

ひとつは、食べることや勉強する、問題を解決するなどの「しごと」です。ふたつ

めは、人とのふれあいや共同などの「しごと」です。今ひとつは、それらを通して自分を知り、自分とうまくつき合っていくという「しごと」です。

これらは、また人生の課題なのです。特に、自分が自分となじみ、自分が自分のベストフレンドになるという課題が重要です。

ひとつの活動には、いつも三つのしごとが含まれ、しかもそれらが同時になされます。例えば、AさんがBさんの車椅子を押す、とします。ここでは、車椅子を動かす（移動）というしごとに加えて、車椅子を押すことを通してAさんとBさんとのふれあいが生まれ、出会い、関係が深まります。さらに、その深まった関係を通して、関係が鏡になってお互いを照らし合ったり、その関係を土台にして相手が鏡やモデルの役割を果たし、それによって自己理解を深め、自分を育めます。

ボランティア活動などでは、「車椅子を押すこと」とともに自己理解や関係づくりを重視します。

セルフヘルプとは

さて、セルフヘルプは、セルフヘルプグループの理念であり、また活動の具体的な目的であり、働きです。セルフヘルプは、「セルフ」を「ヘルプ」する働きであり、方法なのです。病気や障害、人生における役割の変化などの問題を解決していく方法のひとつなのです。

それは、まず病気や障害などを問題としてではなく、生活を創造していくための生活上の課題と考えるところに特徴があります。例えば、「私」や「私の生活」を新しい「目」で見直したり、今までの過去の体験を新しい色で塗り替えたり、新しく意味づけされる課題と考えます。「自分や自分の生活を再発見することなどの課題と考えます。」

しかも、それらの課題の対処を仲間とともにする方法なのです。仲間とともに対処方法を学び合い助け合って課題に取り組んでいく方法なのです。

今、それがどのようになされているかみてみましょう。メンバーは、仲間の「体験を聞き」、支えられ、助けられます。また「体験を語る」ことによって自分を支えるとともに、仲間を支え、助けます。生活の

知恵を交換しあい、知恵を身につけ、それによって自分を助けます。自立性を高めません。しかも、体験を聞き、「私と一緒や」と共感し仲間になります。また、体験を語ることによってメンバーに「私をわかってもらえて」、共感されて、仲間になる営みなのです。

### セルフヘルプという生きる方法

セルフヘルプとは、このように自分を助け（自助）、人を助け（他助）、しかもお互いが「私と一緒やわ」と共感し、仲間になっていくことで、それもそれらが同時になされることを言います。自助と他助が一体化され、そしてなおかつそれらが相互援助（連帯）と一体化されています。

もっと言えば、「仲間とともに生きる生き方」の方法なのです。このようにセルフヘルプの意味を広げますと、さらに仲間を社会に生きる市民にまで広げますと、セルフヘルプの活動とボランティア活動などの市民活動は同じものとなります。市民活動もセルフヘルプ活動とともに「市民が市民とともに生きる生き方」の方法だからです。

### ナンパイの

ひとつこと&ふたこと。

### パークレーの「バ」

少し前のことになるが、五月七日西宮で開かれた「日米福祉交流記念講演会」に参加した。

講演者はアメリカ・カリフォルニア州のパークレーC.I.L.（自立生活センター）の所長マイケル・ウインター氏をはじめ、昨年成立したADA法（アメリカ障害者法）制定に大きな力を果たしたマーガレット・ジェイコブソン氏。そして日本からはミスタードーナツがこの十年アメリカへ送り出した障害者リーダー研修事業の数多くの留学生のうち、一級建築士の立場から障害者と街のアクセスについての問題について

研修された広島県在住の川内美彦氏、そしてメインストリーム協会の副代表であり昨年から今年春にかけて同様に障害者リーダーの研修生として、主に障害者の人権擁護について学んで来られた井内ちひろさんが帰国報告をかねて講演された。

アメリカ側のふたりからは、一九七〇年代から始まった障害者の自立生活運動の経



緯と、「自立生活」の獲得だけにとどまらず、それ以前からの黒人などの人種差別反対運動の結果生まれた「公民権法」のもつ「人権擁護」思想をも障害者運動のうちに取り入れ、より発展させていってようやく成立した「ADA法」のもつ意味の大きさが語られた。

この法律については、すでによくご存じのかたも多くおられるだろうし、私などがここで軽々しく書くことは差し控えたいが極めて大まかに言えば「個人がもつ障害を理由にした一切の差別を禁止した法律」。

折しも、兵庫県では高校入試で身体の障害を理由に不合格にしたという事件で訴訟が行われている。講演会でADA法について自信をもって語ることができるアメリカの障害者が羨ましく思えた。

一方、日本側の講演者の川内氏では自らの経験を踏まえ、行政や企業を動かすことができるのは一部の者が「声高」に障害者運動を叫ぶだけでなく、穏やかな「声」であっても幾つもの幾つものそうした「声」が集まれば、行政であれ企業であれ確実に動かすことはできる、という言葉が印象に

残った。

最後に、帰国早々の井内さんが半年間暮らしたパークレーやその周辺の街の生活の素晴らしさや、日本で感じる日常生活での障害者ゆえの煩わしさから解放されたときの気楽さ。そして、それを支えている「人権擁護」の意識の重要性を強く語られ講演会は終了した。

四人の方の話聞き終えて帰るみちすがら、ふっと心に思った。

確かにADA法のようなスゴイ法律はまだ日本にはない。パークレーのようなステキな街も日本のどこをさがしても見つからないだろう。

しかし、十年前に、あるいは二〇年前にこうして大阪市の南の端から西宮まで車椅子で、このような講演会を聞きにくることが出来ただろうか。川内氏の言われるように幾つもの「声」が集められるとしたら、そして、それを確実に行政や企業にぶつけられるとしたら、案外すぐ近くに「パークレー」の「バ」ぐらいの街を見つけれられるかも知れない。

南光龍平

∞ サロン・あべの紙の

朗読テープが出来ました ∞

「阿倍野区ボランティア連絡協議会」の朗読グループのご協力により、サロン・あべの紙の録音テープを作っていたいただきます。バックナンバーは三九号から、六〇号の分があります。五〇号は五周年記念紙になっており九〇分と六〇分の二本のテープに収録されています。サロン紙朗読テープご希望の方は、富田までお申し出下さい。(TEL 06-691-1028)

井 感謝します 井

カンバ・冊子・はがき・キーホルダー・バザー用品等ありがとうございます。お礼を申し上げます。

六月のカンバ 金三〇、〇〇〇円

石原ふみ子、馬越郁栄、大岩和呂男、岡 賀寿子、柿岡 緑、黒羽玲子、坂井征子、崎本ヒサエ、沢田妙子、土屋由美子、富田万里子、丸山寿美子、柳生幸子 匿名二名様(敬称略)



# Volunteer Center

## 3

### 二 ボランティア活動の現状

五年以上も前のことを現状というのもおこがましいが、昭和六〇年頃のボランティア活動の状況を振り返ってみると次のような状況がみられる。

ボランティア活動をしている人は総理府の調査で九%、現在していないが今後活動してみようと思う人は三四%で、これらをあわせると四割以上の人がボランティア活動に対して積極的な意識を持っている。

また、活動している内容は、複数の活動をしている人がいるので全体が一四四%であるが、その中の一二二%と八割以上が地

域での活動であり、施設での活動の一八%に比べて著しく大きな割合になっている。

このように、地域でのボランティア活動は活発になってきているが、活動者の意識としては「行政がボランティアを育成し、行政の福祉サービスに活用していくべきだ」と考える人が全体の四分の一に近い二四%

のほり、ボランティアは行政の補完をす  
るものという意識は強い。また、ボラン  
ティア活動に対するイメージも「困っている  
人を助けること」という慈恵的なイメージ  
が依然として強いという状況であった。

それでは、この昭和六〇年以降の状況は  
どのように変わってきたのだろうか。

昭和六〇年というのは厚生省のボラント  
ピア事業が始められた年である。これはこ  
存じのように、社協が中心となってボラン  
ティア活動をすすめるように住民に対する  
啓発やボランティアの養成、ボランティア

基金づくりなどを行うもので、こうした事  
業を通して社協の登録ボランティアはどん  
どん増加していった。

しかし、登録者の数字はともかく、「最  
近はボランティア活動をする人が少ない」  
ということが活動をすすめる現場でよく聞  
かれるのも事実である。これは、この何年  
かの間でもずいぶん強くなってきたよう  
に感じられる「個人中心主義」による活動  
への関心の低下によるものと考えられる。

一方、ボランティア活動の内容は、以前  
は「ボランティアII福祉」というイメージ  
が非常に強かったが、環境問題への関心の  
高まりや、生涯学習への取り組みがすすん  
できたことにつれて、これらの分野で活動  
するボランティアも多くなってきたように  
思われる。

これらの活動は「困っている人を助ける」  
というよりも、「自分の生活をより良くす  
るため」という意識が強いものといえるが、  
こうした「生活の質の向上」を求める動き  
がいかに、より社会的なものに広がってい  
くかが課題であるといわれるのである。



原田 仁

## ぼくの「病氣」

強迫神経症という「こころの病氣」があるが、ぼくも、ときどきこれに悩まされる。

それは何かひとつの観念が頭からはなれない病的な状態をいうのだが、あまりに強いひとつの観念が強くなるを縛りつけるので、胸が苦しくなったり、ひよつとしてこのまま異常な感じになつてしまうのではないかと心配になつてくる。

先日もこんなことがあった。

アパートのとなりの人が長い間、不在にしている郵便物がいつぱいになりあふれてしまつている。このままでは次の郵便物がきたときには、どこにも入れるところがない。それで部屋に適当な紙袋があつたので、それを持って外にでて、となりの人の郵便物をいれて袋のままドアにひっかけておいた。

さて、これも小さな親切だな、などと自己満足しながら部屋にもどつてく

ると、ひよつとしてあの袋にゴミかなにか入っていたのではないかと気になりだす。確かに、それはゴミ箱のちかくに開いたまま放つて置いていた紙袋だった。

まずいな、どんなゴミがはいつていたのかなと心配になつてくる。そしていろいろ想像する。しかし郵便物を入れるときには、そんなゴミは入つていなかったような気がする。とはいえ、しつかりと確認したわけでもない。

見に行つてみようか。しかし、見にいつて、となりの人のドアの前に立つていると近所のひとから誤解されないだろうか。まして、他人の郵便物をのぞいているのかと思われたらたいへんだ。それに、となりの人本人が突然、帰つてくるかもしれないではないか。そんなときどう言つたらいいか。

でも、もしゴミがはいつていたら、どうしようか。生ゴミなんかが入つていたら、それこそとんでもないことではないか。

いまはもう夜九時だし、誰にも見られずにチェックできるのではないかと考えるはじめる。

あれこれと悩んだすえに、思いきつて、もう一度となりの人のドアのところまで行く。紙袋のなかをのぞくと、ゴミははいつていない。ああ、よかったと安心して帰る。

しかし、と、部屋にもどつてから思う。郵便物と郵便物の間に、ゴミは、はさまつていたのかもしれない。新聞だとか広告のピラとかが、ごちゃごちゃとたくさん入つていたから、何か薄いゴミなら、まぎれこんでしまつて見えないだろう。

もう一度、確かめようかと思う。この辺で、もうなんだか異常だなと気づくのだが、気づいていても、どうしようもない。

頭をかかえて部屋のなかをぐるぐると歩きまわつて悩んでいると、とつぜん口笛がきこえてくる。となりの人はよく口笛をふく。あつ、もう帰つてきていたのかもしれない。もしかして、郵便物をいろいろさわつているぼくの姿をドアの穴から見つていたのではないか。いや、いや、それとも自分の頭がとうとう異常になつて、ありもしない口笛が聞こえてきたのか・・・。

自分でも、バカバカしいという自覚があるにもかかわらず、その思いをどうすることもできないのが、この神経症の病気たるころなのだ。

大学生時代は、いちいち文字を確認してしまつて本が読めなくなつたという信じ難い体験をした。大学入試ではなんども計算結果を確かめるといふ救いがたい「こだわり」のために苦しんだ。

しかし、いまは「病」にもいいことがあるのではないかと考えるようにしている。強迫神経症者の「長所？」は同じことを長い間異常なくらいに思い続けることである。

社会福祉を勉強するようになってからもう九年目になるが、いままで特定の同じテーマにこだわって、ずっとやってこられたのも、この病気が幸いしているのかもしれない。ぼくの家内が結婚を決意したのも、ぼくが毎日毎日飽きもせず彼女に手紙を書いたからだという。

ぼくの結婚も仕事も、この「病」があつてこそだ。感謝、感謝と考えるようにしている。  
(知)

## 美智子のこんな話



岸田 美智子

### スウェーデン生活体験記

1

一九九一年五月十六日～五月三十一日の二週間、朝日新聞厚生文化事業団主催の今年初めての試みである障害者福祉生活体験旅行で、福祉の先進国としては有名なスウェーデンとフィンランドへ行ってきました。

まず、この旅行は二年前ぐらいから計画されてきたそうで、そのプログラムも選択が出来たし、各個人の現地での急な希望も取り入れていただき（私は、ケア付き住宅で暮らすオーセという私と同じ程度の女性障害者で、健全者の彼と同棲中の家庭を訪

問させていただきました）とても豊富でよく考えられていたと、終つた今つくづく感じています。十五日間という日々が、充実しとても忙しく本当に夢のように早く過ぎてしまいました。

今思えば、中間の五月二四日～二六日の三日間は、言葉の通じない私達の息抜きの滞在？でした。バルト海をバイキングライクンという二五〇〇人乗りの豪華客船（八階



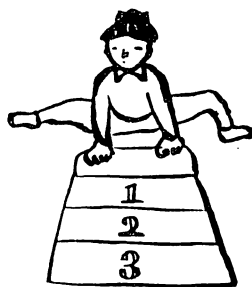
建てでエレベーター付き、車椅子用の部屋あり、子供のプレイルーム、ディスコ、プールありと、まるで動くホテルのようでした。で渡り、約十四時間の船旅でフィンランドの首都ヘルシンキでは、朝市を見たり、障害者協会のお話をお聞きしたり、郊外の障害者の休養施設で一泊し、私はサウナ（フィンランドが発祥の地だそうです）の初体験させていただきました。

また、交流会では、民族衣装をつけた子供達のダンスがとてかわいかったし、カントレという日本のお琴のような弦楽器の静かな音色が懐かしく、それにもまして、日本の散らし寿司が出され、思わず感動してしまい日本の事がとても懐かしく感じられました。

そして、スウェーデンでは、首都ストックホルムから地下鉄で約二〇分ほど北西に行った所のKistaという町にある、重度障害者のステーション オーケ エーキルンド家で八日間、ホームステイさせていただきました。

このエーキルンド家は、家の近くにあるIBM社であたらしいコンピューターが出

来たら、その適性を調べるプログラマーとしてハーフタイム働いている車椅子のステイン氏と、その彼の介助者として市に雇われている健全者のグネル（介助費として毎月一七五〇〇円が支払われる）夫妻そして、その子供達である姉エリザベス十六才と弟ピーター十四才（日本に帰る頃私とはとても彼が好きになっていました……その彼のステキな意識や感性が、この国の世界にも誇れる福祉を支えている一つだと気がついたのです。それらのことは次回に詳しく書きますネ!!!）の四大家族です。そしてこの家は、車椅子用住宅で3LDK以上もある、日本では考えられない広さですし、トイレは二つありますし、ステインの体を持ち上げる為のリフトが二台、トイレとお風呂、寝室の移動用です。そして、なんと！もう一台あるのですが、これは各部屋のどこにでも持ち込んで利用出来るリフトなのです。家の回りには広いバルコニーがあり、左隣りにもう一軒車椅子用住宅がありますが、その作りや外観は皆同じで違和感がまったくなく、淡いピンクで作られていました。



<サロン・あべの>第61号 編集：サロン・あべの 運営委員会 定価 100円

(〒545 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26. 電話06-691-1028富田慶子)

印刷：セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町2-2-10-101. TEL.06-691-2365.